

中國千一夜

風 雅 の 卷

今古奇觀現代語訳

魚 返 善 雄 譯

魚返善雄譯

中國千一夜

風雅の巻

今古奇觀 現代語訳

無断変作・上演・上映・脚色・
放送等は嚴重にお断り致します

昭和廿七年十一月十五日 初版

中国 千一夜

定價 二〇〇円

訳者

魚返善雄

發行所

日本出版協同株式会社

代表者 福林正之

東京都文京区春日町一ノ

電話 小石川(85)四二八六

振替・東京 一九六三三番

印刷所

鎌倉印刷株式会社

(鎌倉製本)

落丁本・欠丁本はお取替いたします

Printed in Japan

中国庶民生活のスケッチとして最も古い宋代説話の名ごりをとどめる明末のユーモラスな短篇集。わが江戸文学にも取り入れられ、翻案や訓読はあるが、これだけまとまつた翻訳はまだなかった。この八篇は、乱離の世情のさ中にも明かるさと清らかさを求めてやまなかつた民衆の切実な気もちを傳えている。

目次

莊子の妻 …… 五

李白の外国語 …… 二七

花きちがい …… 五七

琴のまじわり …… 一〇三

男 と 男
：
：
：
：
：
三九

老 受 験 生
：
：
：
：
：
四七

薄 情 者
：
：
：
：
：
一六

蘇 東 坡 の 妹
：
：
：
：
：
一三

あ と が き
：
：
：
：
：
二三

莊子の妻



莊子の妻

榮華は春のあさ夢、手がらは空の浮き雲。

世の肉親の頼りなさ、なさけもやがては、かたき。

おろかや金の首かせ、何する玉の鎖ぞ。

さらりと捨てた俗の欲、たのしや自然のすがた。

この「西江ふし」の歌は、世間えのいましめで、人情のきずなをたち、身軽になれという。だが親子きようだいのあいだは、同じ幹から出た枝で、たち切れはしない。儒教・仏教・道教、それぞれ、「親子・兄弟」まで否定はできない。ところで子や孫を生むのは、つぎの代の事ゆえ、そこまでは手がまわりかねる。ことわざにも言うとおり――

まご子の代のしあわせと、

あせ水たらすおろかもの。

さて夫と妻とは、「足腰つながる仲」とはいうものの、結局は合わせものの離れものだ。ことわざにまた言つてある――

同じねぐらのめおと鳥、

明けて離れて飛んで行く。

このごろの末世になると、親子きようだいもそれほどではなく、まご子はかわいがるけれども、夫婦の愛情には及ばない。男は妻の愛におぼれ、ねやのくりごとばかり気にする。多くの者が女に迷わされ、親きようだいをないがしろにする。こういう手あいは感心できない。これから莊子が鉢をたいたお話しをするのも、夫婦げんかをすすめるわけではなく、量見のよしあし、本物とにせ物を知り、いちばんの迷いから心をサラリと解き放ち、身も心も清くなり、悟りが開け、幸福にしようというのだ。むかしの人が田植えを見て歌を作つたが、なかなかおもしろい。それは――

さ苗手にして田を植えりや、

水にうつつた青い空。

清いところ根、稻のもと、

さがるひと足、田が植わる。

さて周の末ごろの、りつばな人物で、莊周、別名莊子休は、宋のくに蒙まちの人である。周のウルシ畑の番人となり、ある大人物の弟子になつたが、それが道教の開祖で、李耳といい、別名李伯陽、白髪で生まれたところから「老子」と呼びならわされた。

莊子はよく昼寝をし、夢にチョウとなつて、林や草花の間をヒラヒラと遊びまわつた。目がさめても、まだ腕が羽のようにピクピクする。ふしぎに思つたが、なんともそんな夢を見る。

莊子はある日、老子の前で「易」を習つたあと、この夢の話しを申しあげた。なにしろ大人物だから、三世を見とおしている。莊子に前世のいんねんを話してくれた。この莊子、もともとこの世のはじめには白いチョウであつた。天から水、水から木が生まれ、茂つて花がさくと、その白チョウは花の精気を吸い、日月にあやかり、宇宙にかなひ、不老不死、つばさは車輪のよう。のち「玉の池」に遊び、桃の花のしべを盗んで、「西の女王」のもとで花もりをする鳥につき殺されたが、たましいは残つてこの世に生まれ、莊周となつた。なにしろ生まれが生まれ、信念は固く、老子に仕えて、清く安まる教えを學び、今しも先生から前世をうち明けられると、夢がさめたようで、わきの下がスイスイし、ヒラヒラと舞うチョウチョの気もちになつて、この世の榮華損得は雲か水かを見てすごし、すこしも氣にとめない。

老子はかれの悟りをみとめ、「道德經」五千字の秘伝をそつくり渡した。莊子はよく読んで考え、やがて忍術使いのようになつて、それからは役人としての出世も思い切り、老子に別れて道を求めて歩いた。

清らかさをたつとぶとはいえ、かれも夫婦の道をすてず、つぎつぎに三度妻をめとつた。さいしよの妻は病気で早死にし、二番めは不始末で出され、これから話すのは三番めの、斉せいのくに田家でんの女である。莊子が斉のくに行くとき、田宗はかれにほれ込んで、娘をくれた。この女はさきの妻たちよりも美しく、はだは雪のようで、ゆかしさは天人のよう。莊子は色ごのみではないが、この上もなく大事にし、いたつて仲むつまじかつた。

楚の威王は莊子の人物を聞き、金二千両あまり、あや錦を千反、それに上等の馬車をつけて、大臣に迎えようとした。莊子はためいきをつき、

「おそなえの牛はあや絹をまとい、うまい物をくわされ、野らの牛の苦勞を見ては自慢そうであるが、やがてお社に引かれ、斬られる段になると、野ら牛になることさえないのだ。」

ついに申し出をことわり、妻と宋に帰つて、曹州の南華山に隠れた。

ある日、莊子は山からくだつて、荒れはてた墓場を見、ためいきして、

「若きも年寄りも、利口もバカもない。穴にはいれば、中で人間にもどれはしないのだ。」

と、しばらく嘆いてから、そろそろ行きかけると、ふと一つの新墓、まだ土も新しい。一人の若い女が喪服に身をつつみ、その墓のそばにすわり、手に白絹のうちわを持つて、お墓をしきりにあおいでいる。莊子はふしぎに思つて、

「モシモシ、これはどなたのお墓です？…なぜまた土をおおぎます？…わけがありませんか？」

女は立とうともしないで、あおぎ続ける。口にはなまめかしく、何やらわけのわからぬことを言

つている。このところ――

みなさまお笑いあそばすを、
申しあげるもはすかしや。

女がいうには、

「この墓はあたしの夫で、死なれましたので、ここにいけました、かねて愛し合っていたので、あきらめられません。死ぬときの言葉に、もし再婚したかつたら、お葬式もすんで、墓土が乾いてからにしてくれとのこと、あたしは新墓の土をどうかして乾かそうと、こうしてあおいでおります。」

莊子はおかしくなつた――

「さてもせつかちな女だな。かねて愛していたと言うからいいものの、愛していないやつだと、どんなことになるかな？」

そこでたずねる――

「モシモシ、この土を乾かすのは、わけないですよ。あなたの手はやりわりしていて、力がはいらない。わたしがすこし手を貸してあげてもいいんだが。」

すると女はようやく立つて、ていねいにあいさつした。

「恐れいります。」

と、両手で白絹のうちわを莊子に渡す。莊子は型のごとくまじなつてから、墓のてつぺんをバタバタあおぐと、水分が蒸発して、たちまち乾いた。女は大喜びで礼をのべ、

「ほんとにお世話さまでしたわ。」

と、やさしい手でピンから一本、銀かんざしを抜いて、絹うちわとともに莊子にくれ、お礼がわりにする。莊子は、かんざしは返し、うちわだけをもらつた。女はいそいそと歸つて行く。莊子はごう腹でならず、家に歸ると、わら家の中で絹うちわをながめ、こんな歌をうたつたものだ――

かたき同士の寄り合いは、

果てのしれないからみ合い。

死んでこれほど薄情と、

知れば寄せずにいたものを。

奥さんがうしろで、莊子のこうした嘆きを聞き、そばに来てたずねる。莊子はなにしろ人格者だから、奥さんにも「先生」と呼ばれている。奥さんがいう――

「先生、何を悲観します？ このうちわはどうしまして？」

莊子は、女が墓土をあおいで再婚しようとしたことを話した。

「このうちわであおいだんだよ。応援したので、これをもらつた。」

奥さんは聞くと、たちまち顔色を変え、誰にともなくその女のあきれた愚かしさをこきおろしたものだ。そして莊子に、

「そんな薄情な人つて有りやしないわ!」

莊子はまた歌をうなる――

生きていとしと言う口も、

死んでは墓をあおぐ組み。

絵の龍・虎の骨のよう、

顔は知れども氣は知れず。

奥さんは聞くとカツとなつた。昔から「うらめば他人、おこれば無人」というが、この奥さんも、カツとなるとたしなみなどない。莊子の顔にツバを吐きかけ、

「同じ人間でも、品がちがいますわ。なんでそんな出まかせを言つて世の中の婦人をいつしよくたにし、悪い人によい人を巻きぞえさしといて、失礼とは思ひになりませんか?」

莊子――「理くつをこねなくてもいい。もし運わるく、このわしが死んだら、おまえのようなまだ女盛りの身では、とても三年五年としんぼうはできまいて。」

奥さん――「家来に殿さまは一人、女に主人は一人です。ちゃんとした家の女が、よその茶を飲

み、よその床に寝るものですか！ 万一あたしの場あいたとしても、そんな恥知らずな事は、三年五年はおろか、一生がいでもできませんわ！ 夢の中でも気を許したりしませんもの。」

莊子——「どんなものだから。」

奥さんは言つてのけたものである——

「氣丈女はますらお以上、よ。あなたのような義理知らずなら、死なれたらあとがまをもらい、追いついたあとにすぐ連れ込むから、ほかの人も同じだと思つてゐるんでしょ？ あたしたち女は馬ひとつにクラひとつ、足もととはしつかりしてますわ。人に取りざたされて、のちの世のもの笑いになるのはまつびら！ あなたが死ぬでもないのに、さんざ人をなぶつたりして……」

と、莊子の手から絹うちわを取りあげ、ズタズタに引きさいた。

莊子——「まあそうおこるな。それだけ張りがあればけっこうなことだ。」

それでおさまつた。

なん日かすると、莊子が急にわすらつた。病氣は重くなるばかり。奥さんは枕もとで泣きじやくつてゐる。莊子がいう——

「こう悪くちや、もう長いことはあるまい。あのうちわを破かれて惜しいことをした。残しておいたら、おまえが墓をあおいだのに！」

奥さん——「ずいぶん気をまわしますわね。かねてのたしなみ、みさおを守つて、生き抜きますわ。もしお疑いでしたら、あたしがさきに死んで、心の底をお目にかけます。」